みんなのみなと

Vol.24

ご自由に
お持ちください

もしもを守る。いつもへつなぐ。

日本赤十字社 Japanese Red Cross Society 横浜市立みなと赤十字病院

2026年秋から、横浜市立みなと赤十字病院 は、「サルビアねっと」に参入します。高齢化が進み、医療を必要とする人が増える一方で、医療を支える人手不足も心配される2040年に向けて、医療機関同士が患者さんの情報を共有し、地域全体で患者さんを支える体制づくりが進められています。

患者さんの暮らしを地域で支えるために

岩崎課長

「サルビアねっと」は、病院やクリニック、介護施設などが患者さんの医療や介護の情報を共有し、地域全体で連携するための仕組みです。
横浜市では、これからさらに高齢化が進むことを見据えて、2040年頃に向けた医療体制のあり方を検討しています。特に、85歳以上の高齢者が増えることで医療のニーズが大きく高まる一方、それを支える働き手は減っていくと予想されています。さらに、複数の持病を抱えながら生活する方も増えると考えられています。
このような状況の中では、大きな病院や地域の病院、かかりつけ医がそれぞれの役割を果たしながら連携することが重要になります。これからは、病気を「治す」だけでなく、「治しながら生活を支える」という視点で医療を提供していくことが求められます。
「サルビアねっと」は、こうした新しい医療のかたちを支えるための大切な情報基盤として期待されています。

大川院長

サルビアねっとの意義は、「患者さんを中心とした医療」を実際の仕組みとして実現できる点にあります。
患者さんが医療を受ける流れには、急な病気やけがで治療や手術を受ける段階、その後のリハビリ、さらに自宅での療養やかかりつけ医による継続的な診療など、さまざまな段階があります。これまでは、患者さん自身が紹介状などを持ち運び、医療機関どうしで情報をつないでいたため、情報が途切れやすい状況にありました。
ICTを活用して医療機関や介護施設が同じ情報を共有できれば、診療内容を途切れずに引き継ぐことができます。これにより、より安全で質の高い医療をスムーズに受けられるようになります。つまり、「地域全体で一人の患者さんを支える仕組み」が実現していくのです。

病院と地域の医療・介護をつなぐ

岩崎課長

サルビアねっとによって特に期待しているのが、入院から退院までの連携をよりスムーズにすることです。
これまでも退院に向けた支援は行われてきましたが、退院予定日や転院の調整状況が、地域のかかりつけ医やケアマネジャーに十分に伝わっていないケースもありました。
サルビアねっとでは、退院予定日が自動的に共有されるため、受け入れる側もあらかじめ準備がしやすくなります。さらに、救急搬送時の情報や入院中の状況、生活背景なども共有できるため、地域の医療・介護スタッフが継続して患者さんを支えやすくなります。
サルビアねっとは、単なる情報共有のツールではなく、「生活を支える医療」を実現するための基盤といえます。

また、救急搬送の際に患者さん自身が説明できない場合でも、服用している薬やこれまでの受診歴が分かれば、安全な治療につながります。治療内容が複雑でご本人が把握しきれない場合でも、医療スタッフ同士で情報を確認できるため、より質の高い医療が期待できます。
さらに、災害時にも重要な役割を果たします。もし、かかりつけの医療機関が被災して電子カルテが使えなくなっても、サルビアねっとに接続できれば、別の医療機関で情報を確認しながら治療を続けることができます。
実際に、熊本県では2016年の地震をきっかけにこのような仕組みの活用が進み、その後の水害時にも迅速な医療対応につながった事例があります。

大川院長

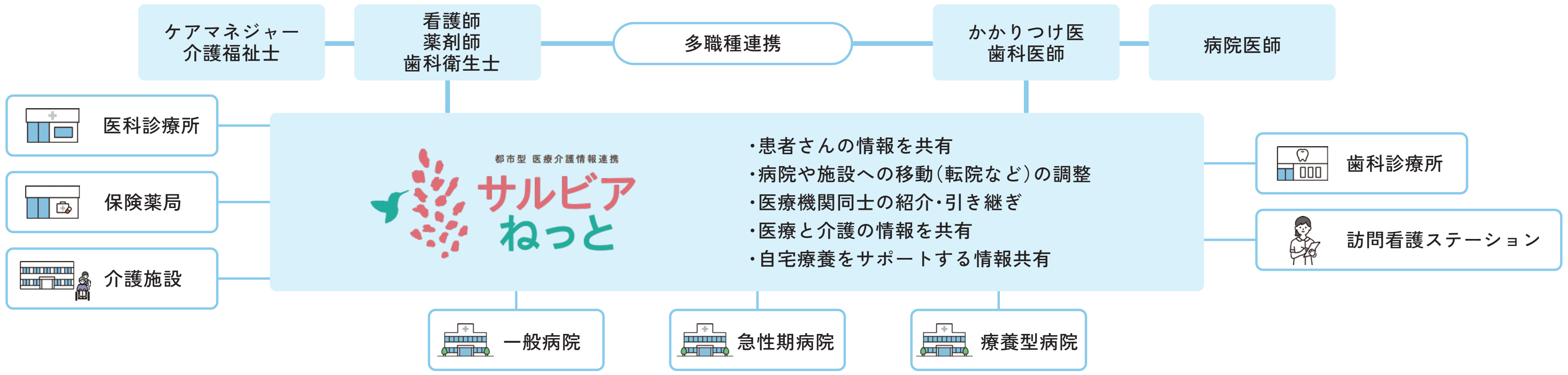
例えば病院では、救急搬送で入院した患者さんが持参した薬を一つひとつ確認し、薬剤師が内容や残りの日数を調べています。サルビアねっとで処方情報を確認できれば、この作業を大きく効率化できます。

これまでは近隣の医療機関との連携も、電話やFAXが中心で、情報のやり取りに時間と手間がかかっていました。ICTを活用して、これまでの病歴や手術歴、検査結果をすぐに確認できれば、より早く安全に治療を進めることができます。

また、最近は重い症状のときだけ急性期病院に入院し、状態が安定したら早めにリハビリテーション病院へ移る流れが進んでいます。大きな病院のほうが安心というイメージを持つ方もいますが、リハビリ専門の病院でしっかり時間をかけて訓練を受けるほうが、回復が早い場合も多くあります。
そのため、適切な転院先を見つけることはとても重要です。サルビアねっとの空きベッド情報を共有する機能を活用すれば、転院先の調整がよりスムーズになり、患者さんにとっても安心で便利な医療につながっていきます。

サルビアねっととは

住民の方の同意をもとに、医療や介護の情報を関係する施設同士で共有できる仕組みです。
地域で安心して暮らせるよう、医療と介護が連携しながら支えることを目指しています。



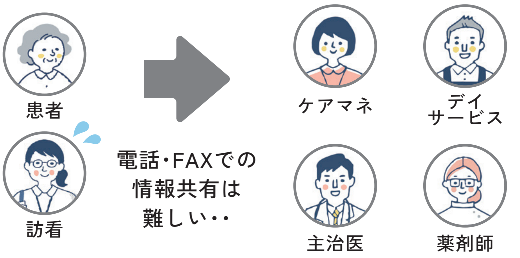
case 01

心不全患者さんの退院後の生活を、多職種連携で支える

心不全で病院に入院した患者さんが退院後、在宅で訪問看護を中心に、デイサービスなども利用する例

サルビアねっと活用前

訪問看護スタッフが情報共有のために連絡を取りますが、つながらない、連携しきれない場合も。



サルビアねっと活用後

患者さんの情報を関係するスタッフみんなで共有できるため、スムーズに連携して患者さんを支えることができます。

こんな安心につながります

訪問看護師が状況を共有することで、みんなで適切に対応できます。

心不全の退院後の経過や体調も、みんなで連携して支えてもらえるので安心。

現場の様子をすぐに共有できるので、主治医や薬剤師からの指示も得やすい。

訪看やケアマネ等からの情報で状況を把握し、適切な指示・対処ができる。

地域全体を一つの大きな病院に

大川院長

いま日本の医療は、「一つの病院ですべてを完結する形」から、「地域全体で一人の患者さんを治し、支える形」へと変わりつつあります。これは、患者さんにとってより良い医療のあり方だからです。

これからは、病院やクリニック、介護施設、薬局などがそれぞれの役割を担いながら、連携して患者さんを支えていくことが大切になります。そのために欠かせないのが、情報を共有する仕組みです。

サルビアねっとにより「地域全体が一つの大きな病院のように機能する姿」を思い描いています。そのためには、医療機関だけでなく、薬局や介護施設、そして地域に暮らす皆さんにも、この考え方を共有していただくことが大切だと考えています。それが、横浜の医療をさらに強くしていくことにつながります。

医療が“つながる”ことで、地域はもっと安心できる場所になります。サルビアねっとを通じて、横浜の医療をこれからの時代に合ったかたちへと進めていきましょう。

お問い合わせ

045-628-6100（代表）

045-628-6101（FAX）

https://www.yokohama.jrc.or.jp/inquiry/

発行：2026年6月

日本赤十字社 Japanese Red Cross Society 横浜市立みなと赤十字病院

〒231-8682
横浜市中区新山下3丁目12番1号
受付時間　平日 8:30〜17:00

JMIP
日本医療機能評価機構 認定第JC1275号-E
Japan Council for Quality Health Care 日本医療機能評価機構 認定第JC1275号